

現象報告のパラドックス¹

青山拓央

本稿は短く単純だが、クオリア（意識の現象的な質感）をめぐる哲学的議論に明快な帰結を提出する（あるいはまったく的外れである）。中心をなす問いは二つである。本稿を読み進める前に、あらかじめ読者自身の答えを用意してもらえればありがたい。第一に、クオリアについての報告（発話や記述行為としての）は、いかにしてひき起こされるのか。第二に、赤さのクオリアと痛みのクオリアは逆転可能か。

1

クオリアは通常、機能的な因果連関から抜け落ちるものとして説明される。ある人物と機能的・物理的にまったく同型でありながら、クオリアを所有していない「現象ゾンビ」（この表現は Chalmers 1996 による）は、こうした説明のもとに想像される。だが、クオリアの脱機能化を徹底的に推し進めたなら、われわれはどのようにしてそれを語ればよいのか。

機能性に頼ることなくクオリアについて語ろうとするとき、われわれは苦しい立場に置かれる。たとえば、われわれは赤さに関して、その「燃えるような色合い」や「血のような鮮やかさ」をもとに、クオリアの質感を語ることはできない。なぜならこうした比喩的な語りは、赤さへの定型的判断であり、現象ゾンビにも機能的に模倣することが可能だからだ。

しかし本当に重要なのは、より洗練されたクオリアへの語りも一種の定型化をまぬがれないことだ。「ほかの色彩との識別可能性とは独立に、赤さがもつ独特の質感」といった、クオリアの非機能性の強調もまた、定型的な表現にほかならないのである。そしてこうした定型的な語りは、十分機能的に処理可能だ。すなわち現象ゾンビでさえ、クオリアの議論に参加できる。意地悪な例を付け加えるなら、P という知覚判断の後に「本当はPではないかもしれないが、私にはPとしか思えないようなクオリアがある」と付言させることは、まったく単純な機能だろう（この例の着想は、大沢 2004 によるバージ [Tyler Burge] の解説から得た）。

赤さのクオリアへの言及の際、われわれは本当のところ、何をしているのだろうか。私の信じるところでは、われわれはその語りにおいて、個別的なクオリアを直接把握する必要がある（この前提が誤りなら、本稿はすっかり台無しとなる）。「赤さがもつ独特の質感」とは、その類別的な表現にもかかわらず、語り手がまさにいま捉えてい

る赤さ、あるいはまさにはいま想起された赤さの個別性に向けられた表現なのだ。こうした語りとゾンビの語りは、聞き手にとっては区別がつかない。しかし少なくとも語り手は、そこにある決定的な差こそを表現しようとしているのである。

2

冒頭であげた第一の問いに目を向けよう。クオリアについての報告は、いかにしてひき起こされるのか。私の前提が正しければ、それは個別的なクオリアを把握することによってである。だがこのことは、クオリアの非機能性と衝突するように思われる。というのも、「個別的な把握についての報告」もまた、機能的な過程には違いないからだ。

随伴現象説を主張するという行為について、考えてみよう。随伴現象説とは、われわれの現象的意識が一切の因果効力をもたず、ただ物理的状态に随伴するという主張である。さて仮にこの主張が正しく、われわれの現象的意識は因果的に無力だとしよう。このとき、われわれはけっしてそのことを主張できない。随伴現象はいかなる意味でも、行為の原因ではないのだから。それゆえ、たとえ本当に随伴現象が実在するのだとしても、それがまさしく随伴現象であるという理由から、その実在が主張されることはない。たとえ物理的世界において「随伴現象が実在する」という「音」が発せられたとしても、それは実在の随伴現象とは何の関わりもないのである。

同様の指摘が、クオリアに関してもあてはまるだろう。「クオリア」と「クオリアの把握」との間の(本当に存在するのか、きわめて怪しい)文法的差異を無視するなら、われわれは随伴現象説を主張することができないように、非機能的なクオリアについても語るができない(上述の差異に配慮するなら、われわれは非機能的な「クオリアの把握」について語るができない)。われわれは非機能的なクオリアの特性についてはもちろん、その実在性さえも語るができないのである。なぜならクオリアの実在性の主張は、何らかのクオリアの把握に関する報告の一種にほかならないからだ(もしそうではないとすると、クオリアの実在性とは何だろうか)。

もしわれわれがクオリアから完全に機能性を剥奪するなら、われわれは随伴現象説に留まることはできず、クオリアについての消去主義を採用することになるだろう。このときわれわれはクオリアの不在を積極的に語るというより、クオリアについての全般的な語り理解できないという状況に陥る。なぜならクオリアとは何のことか、われわれには本当に分からないからだ。

3

クオリア逆転の想定は、クオリアの非機能性を前提にしている。それは次のような具合だ。——私のみている赤さのクオリアと、他者（あるいは別時点の私）のみている青さのクオリアは、実は逆転しているかもしれない。こうしたクオリアの逆転は、けっして気付かれはしないだろう。なぜならクオリアの質感は、認知的判断に関わらないからだ——。しかしこの想定は、どこか中途半端である。その理由を捉えるために、第二の問いに目を向けよう。赤さのクオリアと痛みのクオリアは、逆転することが可能だろうか。

もしクオリアが本当に一切の機能性をもたないなら、その質感はいかなる意味でも判断に影響を与えない。このとき、「水色が赤よりは青に似ており、黒よりは白に似ており、そして青と白の中間に位置する」といった判断は、クオリアの質感に関するものではありえない。そもそもクオリアの質感は、色や音といったカテゴリーの内部で、類似する必要さえないのである。

いくつかのクオリア逆転の例では、特定のカテゴリー（ほとんどの場合は色である）に関し、内部での連続性を保ったかたちの「反転」が想定されてきた。分かりやすく白から黒へのグラデーションで考えるなら、明るさから暗さへのグラデーションが全体として反転するのである。こうした連続性の保持によって、論者はそのカテゴリー内部の体系性を保とうとしている²。

だがこうした体系性は、クオリアの質感に関する類似性の把握が、因果的な影響をもつという前提においてのみ必須となる。クオリアの質感が無力であるなら、体系性は実は要求されない。その際、赤さのクオリアは、すべての色のクオリアはもちろん、他のカテゴリーのどのクオリアとも（痛みのクオリアであろうと寒さのクオリアであろうと）逆転することが可能だろう。結局のところ、すべてのクオリアは、他のどのクオリアとも入れ替わりうる。

あなたはこの帰結を認めるだろうか。過去の論争をみるかぎり、多くの論者はこの帰結を受け入れざるをえないだろう。その「多くの論者」とは、クオリアが機能性をもたないという理由から、現象ゾンビは想像可能であると考えていた人々である。

4

それでは本稿の結論に移ろう。話はきわめて単純である。もしクオリアが一切の機能性をもたないとするなら（それゆえ現象ゾンビは想像可能だと考えるなら）、その人物はクオリアの存在を主張できない。これは、機能性をもたないものが存在しえな

いという理由からではない。それどころか、もしかするとクオリアは一切の機能性をもたない仕方で、本当は実在しているかもしれない。だがそのことがわれわれによって報告されることは決してないのだ。たとえ私が「クオリアは実在する」と発話し、本当にクオリアが実在するとしても、クオリアが機能性をもたないなら、この発話は実在に到達しない（念のため確認しておくなら、ここで私は「クオリアが私的なものであるために、その実在を語りえない」などと述べているわけではない）。

他方、もしクオリアが機能性をもつなら、現象ゾンビは不可能だろう。ゾンビはクオリアの欠落による機能的損失を補うために、われわれがもたない何らかの機構を備えている必要がある。これは純粋な現象ゾンビではない。あるいは、物理的なわれわれのコピーは必ずクオリアをもつがゆえに、われわれと同様に振舞えるのかもしれない。この場合にも現象ゾンビは不可能ということになる。

クオリア逆転の想定が体系性を保持するかたちで語られてきたという事実は、実はわれわれがクオリアの機能性のある程度認めていたことを示唆している。そこで認められているのは、個別的なクオリアの把握、およびクオリアの類似性の把握が、判断に関する発話や記述をひき起こすという機能性である。本稿の議論が正しいなら、われわれはこの機能性を認めるとともに現象ゾンビを拒否するか、あるいはこの機能性を拒否する代わりにクオリアへの語りを放棄するか（この場合、われわれは自分が現象ゾンビでないことを知らない）、いずれかの道を選ばねばならない（筆者は前者の道に惹かれる）。そしてどちらの道を選ぼうとも、完全に非機能的なクオリアの把握が語られることはないのである。

注

- ¹ 機能性をもたないものとしてクオリアを定義するならば、クオリアについての報告は（たとえクオリアが実在するとしても）なぜ因果的に可能となるのか？ これが本稿で検討される中心的なパラドックスである。本稿を書き終えた後に私は、チャルマーズが同種のパラドックスを「現象判断のパラドックス」と名付け、それへの反論を試みていることを知った（Chalmers 1996, 5章）。私には、その反論が成功しているようには思われなかったが、咀嚼できていない論点もあるため、検討は次の機会に譲りたい。本稿はタイトルにおいてのみ、チャルマーズ（および彼がこのパラドックスを学んだ論者）に敬意を表した。
- ² 私は以前、音階のクオリア反転について考えてみたことがある（未刊行）。もし音階のクオリアの上下が反転したとしても（可聴音域の中間音を境に反転させればよいだろう）、音楽的な体系性は保持されるように思われる。ところでこの場合、長調と短調の関係はどうなるだろうか。興味深いことに、長三度の和音のクオリアは、短三度の和音のクオリアと入れ替わる。ではここで質問したい。逆転した長三度の和音は、明るく響くのか、悲しく響くのか。この想定は一種の頭の体操ではあるが、

体系的なクオリア反転という設定に関して一考をうながすものであろう。類似性のグラデーションを反転させるだけで体系性が保持されるかどうかは、慎重に検討すべき問題である。

参考文献

- チャルマーズ, D. 2001, 『意識する心』, 林一訳, 白揚社 (D. Chalmers 1996, *The Conscious Mind*, Oxford University Press.)
- キム, J. 2004, 「随伴的かつ付随的な因果」, 金杉武司訳, 『シリーズ心の哲学 III・翻訳篇』, 勁草書房 (J. Kim 1984, "Epiphenomenal and Supervenient Causation," in *Supervenience and Mind*, Cambridge University Press, 1993.)
- 大沢秀介 2004, 「外在主義と自己知の正当化」, 『シリーズ心の哲学 I・人間篇』, 勁草書房, 2004

(あおやま たくお／社会文化科学研究科・日本学術振興会特別研究員)